

木曾三川 歴史・文化の調査研究資料

# TRISEO

2010

秋

Vol.76

平成22年

## 地域の歴史

飛騨川支流沿いの狭隘地

お茶とヒノキの名産地、白川町・東白川村

## 地域の治水・利水施設

白川町の水力発電の歴史と現在の発電施設

## 歴史記録

明治改修 第十編

木曾川下流改修工事の総仕上げ

揖斐川導流堤

## 研究資料

石田 泰弘

海部地域のアメリカ移民





# 飛騨川支流沿いの狭隘地 お茶とヒノキの名産地、白川町・東白川村

岐阜県の東部加茂郡白川町・東白川村は、飛騨川に注ぐ白川・佐見川とその支流沿いに集落が散在する山間地です。江戸時代には苗木藩の重要な財源となっていたヒノキと、狭い河岸段丘を開拓して作られてきた白川茶が全国的に知られています。

## 飛騨川水系白川・佐見川



岐阜県と長野県の県境の小秀山こひでやまを發した白川は、中津川市(旧加子母村)から、東白川村を通って白川町の西で飛騨川に合流しています。東白川村は、東が中津川市と接し、北西南が白川町に接しています。村の中央を西流する白川とその支流沿いに耕地や集落が点在する山間地です。同様に、白川下流部にあたる白川町も山林が九〇%を占める山間地で、白川とその支流や、町の北部を流れて飛騨川に注ぐ佐見川に沿って集落が形成されています。



白川町河岐地区

白川町では、切井小丸山遺跡から先土器時代の石器が採集されています。縄文時代の遺跡は全期にわたって数多く見つかっており、小原遺跡と中之森遺跡では住居跡が確認されています。山間地であるため、弥生時

代の遺跡は多くはありませんが、前期の土器が出土しており、かなり早い時期に農耕技術が伝わってきたようです。

鎌倉時代以降、当地域を支配していた在地の勢力は、戦国時代に、苗木城の遠山直廉の侵攻を受け、支配下に入りました。その後、苗木城主遠山友政は、秀吉の家臣・金山城主森長可の侵攻を受け、当地域も、森氏の領地となりました。その後、関ヶ原の戦いの論功行賞で、旧領を回復した遠山氏が苗木城に入り、当地域の多くが苗木藩領となりました。

## 白川町の三領分属支配

正保二年(一六四五)の「美濃郷帳」によれば、白川町域には二八ヶ村があり石高三〇〇二石と記録されていますが、領主は、苗木藩領二ヶ村、尾張藩領四ヶ村、幕府直轄地・旗本知行地三ヶ村が分属していました。

一万石の小藩である苗木藩にとつて、領地の大半を占める山林は重要

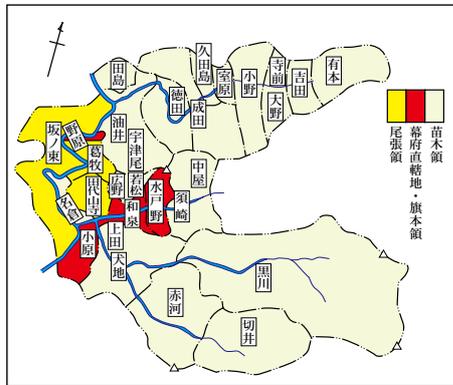
な財源でした。藩が管理する山林はお立山と呼ばれ、藩ではお立山を計画的に払い下げて財政の一部に当てました。払い下げ先は入札によって決められ、小規模なお払山は領内在住の者に限り、他領の材木商を排除しました。

耕地の少ない苗木藩は新田開発を積極的に奨励し、初代藩主遠山友政から三代友貞までの間に四千石余の新田が開発されました。白川流域の村々でも開発が行われましたが、狭い河岸段丘や尾根沿いの小台地に細々とした耕地を開いてきた山峡の地では、平坦地に見られるような大規模な新田を開発する余地はありませんでした。このため当地域では、水田の収穫量を増やしたり、それまでの畑地を水田にかえることが主な開発でした。

新田開発や増産のために最も重要なことは灌漑用水の確保でした。白川との合流点から二〇〇mほど上流の赤川から水をひいて上小原の水



田を灌漑する「朴井水」は、明暦三年(一六五七)から三ヶ年かけて建設されました。大地村藤井の田を潤す藤井用水は、赤川から引水する延長二kmの用水で享保一四年(一七二九)完工といわれています。水戸野村(幕府領)の用水取入口は、他領の須崎村(苗木藩領)にあつたため、年米一石を支払っていた記録が残っていますが、施工の時期はわかっていません。和泉・中屋・須崎村にも、白川から取り入れる用水がありますが建設の時期



は不明です。個人個人で小谷や湧水から水をひいて田を拓いていた山村では、用水の取水口・水路がたとえ他人の所有地に移っても、水利権は初めて用水を開鑿した者にあることが不文律として存在しました。一例として、切井村中の頭近くの満中新田は、小栗家が独力で赤川から用水を引

この満中新田用水の取水口近くで新田を起こそうとした庄七郎という者が、工事に着手した後で小栗の用水に差し障りがあることがわかったので詫言を入れた書状が残っています。また、井水の水利権は財産価値もあって、質入れ・売買の対象とされることもありました。

尾張藩領は、坂ノ東村・葛牧村・田代山寺村及び野原村の一部の区域で、藩は、国奉行の下に代官・郡奉行・水奉行・山方奉行・野方奉行を置いて領地を統治していましたが、天明元年(一七八二)九代藩主宋睦の時代に国奉行所の改革を行い、領内に一ヶ所の代官所を設け、郡奉行・水奉行・野方奉行を廃止しました。白川町域の尾張藩領も、天明二年に設置された加茂郡太田村の代官所支配となりました。

## 白川・飛騨川の運材

白川の最上流部は、中津川市(旧加

子母村)を流れ、加子母川と呼ばれていました。加子母村は、尾張藩が支配する木曾山の中でも有数の檜の産地で、刈り出された材木は、加子母川・白川から飛騨川に流送していま



白川(東白川村)

した。東白川村・白川町域の苗木藩領から伐採された材木も白川を使って運ばれましたから、流送の時期の白川は、大勢の川狩り人夫が働いていました。川狩りは秋から冬に行われたので、農閑期の農民にとって大切な収入源となっていました。



飛騨川の近大付利

白川が流入する飛騨川は、上流の飛騨一國が幕府直轄地でしたから、上流から公儀御用材が流送されてきました。白川町辺りの飛騨川はまだ川筋が細いので材木は一本ずつ流す管

流して運ばれ、川狩り人夫が川に入って、岩にひっかかりたり、淵に留まっていた材木を流れに戻していきました。坂ノ東村大利には、川を横切って綱を渡し、一時的に材木を留めて、夜は材木を流さないようにするなど流送を調節する綱場が設けられました。

飛騨川を下る材木は、下流の下麻生(川辺町)で筏に組まれてさらに下流へと運ばれました。

## 寺のない村・東白川村

明治維新の思想的背景となった尊王思想の影響を受け、慶応四年(一八六八)神仏分離令が公布されると、藩によっては極端な廃仏毀釈を實行する所が現れました。苗木藩はその代表で、明治三年(一八七〇)平田国学派の家老青山直道によって廃仏毀釈が命じられ、藩内の寺院・仏堂はもとより民家の仏壇なども取り壊され、仏葬は神葬に改められました。今でも苗木藩領だった地域は、神道を祀る家が多くあります。中でも東白川村は、仏教復活・寺院再建などの動きが全く見られず、今では全国で唯一「寺のない自治体」となっています。



四つ割の南無阿彌陀佛碑

## 白川茶とオルガンの町

白川町・東白川村の名産品として、白川、赤川沿いの傾斜地で生産されている白川茶が全国的に有名で、標高が高く朝夕は川霧が覆うため、常に空気に適度な湿り気があり、

土壌も赤土なので、茶の生産に適しています。栽培の歴史は古く、室町時代に東白川村蟠龍寺(現在は廃寺)の住職が、宇治から茶の苗を持ち帰り、村人に栽培を勧めたのが始まりと言われています。



茶畑

白川町の町民会館には高さ六・七m、幅四・七m、パイプの総数一四九六本の大型パイプオルガンがあります。国際的なオルガン建造家・辻宏が黒川の旧校舎を工房にしてパイプオルガンを製作してきました。この地は東濃ヒノキの産地として知られ、伝統の製材技術がオルガンづくりを活かされ、良質な用材も四方の山々から産出されます。町ではオルガン音楽を学ぶ「白川・イタリアオルガン音楽アカデミー」を開催するなど音楽の素晴らしさを通じた町づくりを推進しています。



パイプオルガン

### 参考文献

- 「白川町史」昭和四三年 白川町
- 「岐阜県の地名」平成元年 平凡社
- 「日本地名大辞典」昭和五年 角川書店「岐阜

## 地域の 治水・利水 施設

# 白川町の水力発電の歴史と

## 現在の発電施設

大正時代の白川町域では、飛騨川支流に、たくさん的小規模水力発電施設が造られ、山間地の集落に電灯を灯しました。こうした発電施設は次第に大きな施設に吸収されていき、やがて飛騨川に大規模な発電所が建設されるとともにその姿を消していきました。

### 山間地の水力発電

わが国の初期の水力発電としては、明治三年（一八九〇）に足尾銅山と下野麻紡績会社で自家用水力発電が設けられたのが知られており、これは世界的にも早期の水力発電であったと言われています。しかし、大規



上麻生ダム

模な発電所が建設されるのは、技術が進歩して長距離の送電が可能となる明治後期からでした。こうした大規模発電とは別に、山間地の小河川沿いでは、自家用程度の簡易で小規模な発電施設が造られるようになります。河川沿いの集落では、近くを流れる川の落差を利用して水車を廻すことが比較的簡単にできるためでした。

白川町域の集落でも、大正前期に数多くの発電施設が設けられていますが、残存する史料が不十分で、発電所の正確な数や規模などの全貌はわかっていません。

### 白川町各地の発電施設

佐見川では、「はじめは鶴屋単独、後、近くの人々が加入。大正九年二月点灯。」「二二戸共同、大正九年四月点灯」「八戸共同、大正八年八月点灯」「二二戸共同。大正九年点灯」などが記録されています。この地域の発電は大正十二年（一九二三）末頃に

終わり、以後は東白川村からの送電によって地域全体に電気が通るようになりました。また、佐見川の downstream には、大正五年（一九一六）頃に建設された、三〇kwと五〇kw二台の発電機を備えたかなり大きな発電所がありました。

赤川では大正四年（一九一五）、今井銀三郎が水車に発電機を取り付け自宅に電灯を灯しました。その後これに参加する者があつて、大正九年（一九二〇）二kwの発電所を設置、一四戸に点灯したとあります。同じ頃、藤井兵吉の経営する発電所があり、これを拡張して地域全域に通電させる気運が高まり、大正一〇年赤川電気株式会社が設立されました。これらの発電所は昭和一四年（二三三九）東邦電力会社に吸収合併されました。

黒川では大正中期中に殖産株式会社黒川鋳業所の発電計画を知った黒川村が、水利権を承認する代償として電力を提供してもらう契約をしまし

た。しかし、鋳山の経営不振によつて計画は頓挫してしまい、村は村営発電所の建設を決意し、大正一〇年村

議会で議決して電気工事施工認可の申請をしました。工事は順調に進み、大正一二年四月に完成、その規模は、出力四七kw・水路五四〇m・需要戸数六八九戸でした。

白川を利用した小規模の発電所も中川（旧中屋村・須崎村）や水戸野などに造られたようですが、長く運用されたものはありませんでした。その中で本格的な発電所が二つ建設されています。大正二年一月に設立された白川水力電気株式会社は、出力一二kwで三四七戸・七三〇灯を灯しました。また、大正一三年に組織された中川電気利用組合は、組合員一三〇戸・点灯数二五〇灯で発電、昭和六年（一九三二）出力二〇kw・三五〇灯を増やして県社白山神社まで送電しました。

### 飛騨川の水力発電所

大正時代の白川町では町を流れる





# 木曾川下流改修工事の総仕上げ 揖斐川導流堤

明治改修の主要な目的だった木曾三川の分流に見通しがつき、工事は揖斐川筋の築堤整備と、揖斐川河口部のしゅんせつ・導流堤の築造にかかりました。この工事の完成によって、二五年間に及んだ明治改修は、全ての工事を完了しました。

## 七郷輪中の開削

明治改修の主眼である三川分離の目処がついてきた明治三三(一九〇〇)年になると、改修工事の重点が残されていた揖斐川筋に移り、渇水期を待って下流端の七郷輪中(桑名市多度町)の引堤が始まりました。江戸時代の宝暦治水においては、この七郷輪中を縦断する水路の開削が検討されました



揖斐川改修の上流端

が、明治改修においても、デ・レイケは多度川・ひしえ川など揖斐川右岸山地からの流出土砂対策を最優先するよう提言し、ひしえ川においては、他の地域に先駆けて明治十二(一八七九)年に砂防工事が始まりました。

そうして、七郷輪中には多度川・ひしえ川からの流出土砂を流し込み、これによって、輪中内の地盤が高くなつてから、揖斐川を開削するとともに揖斐川右岸堤防を新設する計画を策定しましたが、実施にあたっては、

施工期間が不透明であり、多くの家屋移転などが伴うため困難であるとして、現在のよう



揖斐川河道に残る七郷輪中の引堤跡

に計画変更されました。

## 揖斐川中流部の築堤は国直轄で

揖斐川筋の築堤計画は、東海道線鉄橋のやや上流の呂久地先(瑞穂市呂久)から南ノ郷地先(桑名市多度町)までの約三三kmのうち約三二kmの間です。

築堤に必要な土砂量約四八〇万m

は、すべて浚渫土砂によって賄われ、明治三七(一九〇四)年度に全ての築堤工事が完成しました。

工事の施工は、明治一九(一八九六)年四月河川法(法律第七一号)の公布により国の直轄施工が可能となつたため、明治三一年度以降の築堤工事は、三重県・岐



木曾川改修工事概要

## 揖斐川河口部の改修計画変更

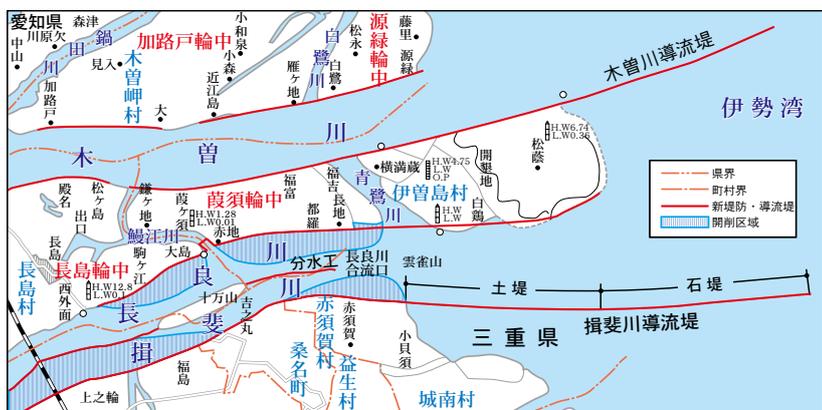
明治二〇(一九八七)年四月に着工された木曾川下流改修工事計画(明治改修)では、三川分流を主体とするため、揖斐川導流堤などの揖斐川河口部の計画は除外され、「しゅんせつ」のみで対応する計画となっていました。

明治一九(一八八六)年、着工の際に決定された予算総額は、明

治二〇年度より明治三五年度までの一六ヶ年継続事業として、四〇二万八、一八八円五五銭(うち国費三二万八、一八八円五五銭)でしたが、明治二四(一八九一)年の濃尾大地震や明治二七(一八九四)年の日清戦争による物価の高騰、船頭平間門建設費の新規計上などを含めて明治二十九年三月に、竣工年度を三ヶ年延伸して明治三十八(一九〇四)年度とし、予算総額を八三九万二、三四円三〇銭一厘へと大幅な増額を行いました。

しかし、その後も物価の高騰が続き、明治三五(一九〇二)年頃には、既定の予算によって残工事を竣工させることは不可能な状態となっていました。加えて、濃尾地震による土砂の流出は揖斐川河口の河床を上昇させたため、当初に見込んだ「しゅんせつ」のみによる方法では河床が維持できないと判断し、揖斐長良の分水工を延長すると共に、河口部に揖斐川導流堤を施工する計画へと変更

しましたが、国会解散のため予算が審議されず、明治三七(一九〇四)年には、緊急政府支出金二一百万円により最低限の工事を継続する異常事態に遭遇しました。明治三八(一九〇五)年になって、残工事を精査し予算額を八七万二、九九八円増額変更しました。



損斐川河口部の改修計画図

また、明治三一(一九九八)年度以降は、岐阜県・三重県内の築堤工事の残工事を直轄工事として施工することになりましたので、そ

れ以前の三県施工の築堤工事費および明治一九年度からの繰越金を含めた木曾川改修総予算額は、九七四万六、九九〇円七二銭九厘(うち国費七十一万五、二四四円一厘。県費二六三万二、八六六円七二銭八厘)となりました。

### 城南干拓と導流堤

損斐川河口部においても、木曾川と同様に江戸時代に開発されていた耕地がありました。安政四(一八五七)年の大津波によって、堤防・耕地ともに流され荒地のまま放置されてい

ました。対岸の木曾川筋の松蔭新田が、改修工事を契機として再墾されたことから、明治二六(一八八九)年四月、同年七月。さらに明治三八(一九〇五)年一月、三九年、四〇年と再開発の計画がありました。が、いづれも実現しないままに終わりました。



土堤防部分の河川堤防現況 城南干拓地付近

してから実際に三三年が経過した昭和一七(一九四二)年、国内での食料増産のため干拓計画が策定され、昭和二二(一九四七)年に、

国営干拓事業が開始され、昭和三二(一九五九)年一〇月一六日に完工式が行われました。

堤防工事は、損斐川河口土地造成費により、国の直轄事業として、城南出張所を設置し、導流堤の土堤防の河川堤防への改築・海岸堤・樋門を建設し、現在の城南干拓の外郭を作りました。

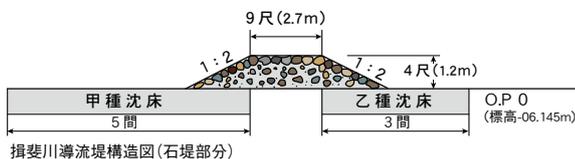
### 損斐川導流堤

損斐川導流堤は、明治三八(一九〇五)年の追加予算要求の際、損斐川の河口維持のため必要不可欠な施設として計画が認められ、明治三九年一月より着手し、明治四二年度を以て完成しました。

なお、損斐川導流堤は、木曾川導流堤とともに土木学会選奨土木遺産に指定されています。

導流堤の延長は、約五、六七〇mでそのうち陸地側の約二、七三〇mは木曾川導流堤と同様に「土堤」として施工されました。

明治三九(一九〇六)年一月に着工した時点、干拓計画とどのような調整が行われたのかを明らかにした文書は発見されていませんが、干拓の再開発の動向を考慮して、木曾川



損斐川導流堤構造図(石堤部分)



損斐川導流堤土堤部分の構造図

筋と同様に土堤部分を計画したものと考えられます。

土堤部の築堤は、全て損斐川河口部のしゅんせつ土砂によって築立てられました。天端高OP四・五m(OP〇点高は標高マイナス〇・六一四五m)、天端幅七・二m、表勾配六割、裏勾配三割として、法覆工や根固工によって法面や基礎が保護されました。

石堤部分は、沈床を敷設した上に雑割石により築堤する方法で、天端幅は約二七m。天端高OP一・二mでした。使用した石材は、愛知県幡豆郡内の各地より購入していましたが、明治四〇(一九〇七)年秋より価格が高騰したため、明治四一年より損斐川右岸城山の国有林(海津市)より、直営工事により石材の切り出しを行いました。

### 分水路の延伸

損斐・長良川の低水路を分離する分水工の下流端は、当初計画においては、損斐・長良背割堤の下流端の寄洲(通称「十万山」)を利用して、その下流端としていましたが、低水位の変動実態から鑑みて、十万山下流へ分水



# 研究資料

## 海部地域のアメリカ移民

愛西市教育委員会 石田 泰弘

### 愛西市域 移民のはじまり

明治から大正にかけての時期、この地域から渡米者、すなわちアメリカへ移民する人たちが多数ありました。



サクラメントの輪中

丸島(愛西市)の山田芳男という人物がラッコ猟にでかけ遭難しアメリカの船に助けられ、カリフォルニアにて農業に従事し、カリフォルニアでの労働の可能性を感じ、郷里に戻り勧誘したのが発端といわれています。

未知の国アメリカでの就労は不安が多く、当初は山田の身内および周辺の数名レベルであったといわれています。

しかし、アメリカ移民が本格的にこの地域に展開した、すなわちこの地域においてアメリカ移民をブッシュした要因として、西川端(愛西市)の鬼頭次郎が渡米した際にわずかの期間に大金を送付したことから、一攫千金を目指して渡米したということが『北米愛知県人誌』等で指摘されています。また明治二四年の濃尾大震災や明治三〇(一八九七)年の鶴多須切れとよばれる佐屋川決壊等の災害や地場産業である佐織綿を中心とした織物業の不振等による経済的

不況による農村の疲弊も渡米をブッシュした要因であったと思われます。

今日のこれだけ交通機関等が発達した時代にあつて、また国際化時代にあつて、渡米という行為は大した行為ではないと思われるかもしれませんが、当時としては船による渡航しかなかく、しかも人によって差異がありますが多額の金を準備しなければ渡れなかったことから、大変な決



当時のパスポート

断が要ったことは想像することができます。

移民というと下層民の食い扶持減らし的なイメージを髣髴させますが、この地域からの移民は、戸主、長男が多く、中層クラスが多かったことから、決して従来のような移民像ではなかったことが指摘できます。

愛西市域とその周辺地域から多くの移民がカリフォルニアへ渡りま



石田 泰弘 氏

1964年1月2日生まれ  
中央大学文学部史学科国史学専攻卒業  
1988年3月、愛知学院大学大学院文学研究科歴史学専攻修士課程修了

現在：愛西市教育委員会社会教育課勤務



渡米書類

した。旧佐織町域では、明治三三(一九〇〇)年当時常に五〇〇人近くアメリカに在住していたといわれています。

中でも見越(愛西市)は一軒に約一五人が移民したといわれています。全国の移民多出地域と比してみても有数の送出地域であったといえます。まさに愛知の北米村といえましょう。さて、地域を旅立ち、アメリカへ渡った彼らはどこへ向ったのでしょうか。

### 現地での生活

まず、サンフランシスコに到着して、その後内陸部に入り、カリフォ



サクラメント



ウォールナツグロヴへの道しるべ

ルニア州の州都サクラメント近郊で多くの移民は農業に従事したといわれています。サクラメント市からその南方にスタクトン市がありますが、この地域を河下地域と称します。この地域で



地下地域図

水位よりも低い地域、高い堤防で囲まれた地域でした。また土壌もピートとよばれる土壌でまさに輪中そのものでした。アメリカ人にとってはなんともならなかった土地を農地に変え収入源にしてくれた彼らを歓迎したことは事実ですが、愛知県出身者がこの地域で活躍した要因としてこの地勢が類似していたこともあったのかもしれない。

河下地域のほぼ中央部にウォールナツグロヴという街があります。ここには愛知県出身者が集まり、まさに「北米の愛知村」として愛知県出身者のコミュニティ形成の場であったといえます。この街には「愛知館」とか「見越商店」とか愛知県出身者による店舗経営がみられました。



愛知館

### 排日の動きと移民

日系人は総じて低賃金でしかも勤勉であったため、経営主には信用をうけ歓迎されたのですが、他の労働者とともにアメリカの労働者にはなかなか受け入れられなくて、排日の動きが高まり、ついには太平洋戦争へ



ウォールナッツグループの建築物

と突入し当時の移民にとつてはまさに試練の時期であったといえます。

帰国するもの、そのまま現地へこのもの、選択はあつたわけですが、帰国するものとはともかく、現地へこのものは昭和一六(一九四一)年敵性外国人とみなされ、強制収容というキャンプへ入れられてしまいました。

強制収容を経験した方々の言によれば、日本からもアメリカからも見捨てられまさに移民ではなくて棄民だなんていう人もありました。また収容所での生活は、バラック小屋での生活で、悪状況のなかでの生活を強いられたといえます。ただ一番辛かったのは仕事がないことだったといえます。まさに日系人の勤勉性がうかがい知ることが出来ます。

### 故郷への思いと石塚文庫の設立

いささか余談が長くなりましたが、移民した人たちは、郷里をすてたとみなされがちですが、必ずしもそうではありません。それはこの地域に彼らによる寄進等郷里への思いがたくさん見ることが出来ます。津島神社の南の大鳥居はアメリカ移民による寄進です。錦衣帰郷を夢見た彼らの思いをうかがい知ることが出来ます。

草平(愛西市) 出身の石塚国三郎氏は幼少期苦学した経験から母校のためにと草平小学校に送金をしました。

同校ではそのお金を基金として石塚文庫を設立、児童の教育に大いに貢献されました。石塚国三郎氏の妻タカさんのお宅へ訪問した際、私は大変感動を覚えました。テレビではNHKの衛星放送を受信し、日系新聞を読み、日本の状況に精通しておられたことには、正直驚きました。日本を棄てたのではなく、この人たちの日本への思いの大きさを知りました。

しかし何といっても感動したのは食事でした。我々を迎えてくれた料理は、アゲズシと太巻寿しと煮物でした。それは幼い頃祖母がつくってくれた、尾張の懐かしい味です。しかも彼女は、朝食はいつもご飯と味噌汁、漬物は手製という日常生活

だということです。私は失われつつある地域の文化をアメリカの地で考えさせられるとは思いませんでした。



石塚家での食事

### 愛西市との深いつながり

愛西市では、佐織町期以来サクラメント愛知県人会との交流を深め、海外派遣事業を展開しています。中学生を引率して現地へ赴いた際、交流している最中に現地の日系人から中学生の使っている日本語がおかしいと指摘されたのは正直失笑しました。日本人であるはずの中学生が日系人に正しい日本語を教えられていたからです。ある意味では日本文化を大事に守っているのかもしれない。

戦後経済大国として成長した日本は移民を受け入れる側になりました。マイノリティ問題や地域における共生など、様々な話題が各地で見られるわけですが、こうした問題解決を考えていく上でも移民の歴史は示唆するところが大きいのではないかと考えます。

アメリカ移民の歴史は、時代の経過とともに風化しつつあります。一世や二世といった方々の高齢化や死亡によってどんどん伝えることが難しくなりつつあります。アメリカ移民の中でこの愛知県とくに海部地域が重要な役割を果たしていたことや彼らがこの地域の発展に対して貢献していたことを考えると、決して風化させてはいけない歴史であることはいまでもありません。



河下地域の風景

#### ■参考・引用文献

- 『北米愛知県人誌 水谷富嶽』 大正九年 北米愛知県人会
- 『八雑景V日本・アメリカ 羽澄英治』 平成九年 第一学習社
- 『佐織町史通史編』 平成元年 佐織町

# おひこと寒八

(白川町坂ノ東大利)

昔、水が乏しい大利村で、働き者の寒八と嫁のおひこが、荒地を耕して田んぼの開発を試みました。一番の問題は、やはり水。二人は、山持ちの大利長者様に「山の谷水を分けて欲しい」と頼みにいきました。しかし、願いは冷たく断られ、しかたなく二人は、あちこちの湧き水を使うことにし、三年がかりで水路を造り、やっと田植えができるまでにしました。

ところがこの夏は雨が降らず、困った村人が雨乞いを行うと、「乏しい水で自分の土地に引き入れて勝手気ままに使う不心得者がいる。その者が改心しない限り雨は降らさん」と言う神のお告げがありました。

「不心得者は、寒八に違いない」、怒った村人たちはこぞって寒八に田んぼを潰すように迫りました。事の次第を聞いたおひこは、その夜、寒八の枕元で、悲しげに「寒八さん、さようなら」と言つてそと家を出ていきました。

寒八がおひこを探して、飛騨川まで来たところ、おひこの体が宙に舞い淵に吸い込まれていきました。あわてて淵を覗くと、とても大きな鯉が水をたたいて水しぶきをあげています。水しぶきはやがて水煙となって天に昇り、豪雨となって降り注ぎました。

恵みの雨に村人たちは、大喜び。雨はいよいよ激しく降り、谷川は滝のようになって、谷水を独り占めしていた大利長者の屋敷を飛騨川まで押し流したそうです。



## 木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曽三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。



《開館時間》  
午前8時30分～午後4時30分

《休館日》  
毎週月・火曜日(月・火曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》  
国道1号尾張大橋西詰から車で約10分  
名神羽島I.Cから車で約30分  
東名阪長島I.Cから車で約10分

木曽川文庫へのお問い合わせは

〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原  
TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166  
Mail kisogawabunk@mist.ocn.ne.jp



木曽川文庫ホームページ

<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/bunko/index.html>

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハニス・デ・レイケ」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

## 編集後記

明治改修シリーズ第一編～第七編はVol.61～Vol.67、第八編からはVol.74号以降を参照下さい。

なお、この資料は、創刊号からの全てが木曽川文庫ホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上「白川橋」

清流白川と飛騨川の合流点に大正15年に架けられた白川橋は、美しい山々に囲まれ季節によって四季折々な景色を見せてくれます。平成18年11月には、土木学会選奨の土木遺産に指定されています。

中「飛水峡」

白川町から七宗町にかけての飛騨川は約12kmにわたって美しい深谷が続く。景勝地「飛水峡」として知られています。川の岩盤には長年の激流によって浸食されたポットホールと呼ばれる円形の穴が数多くみられ国の天然記念物に指定されています。

下「白川 河岐地区」

かつて木材流送で賑わった白川は、今では鮎釣りの好適地として、夏のシーズンには、あちこちで川に入って友釣りを楽しむ釣人の姿を見かけます。長い時間をかけて洗われた河原の石の白く美しい様子が、白川の名の起りと言われています。